飛行機雲

大林清

POPULAR BOOKS

昭和40年12月10日　発行

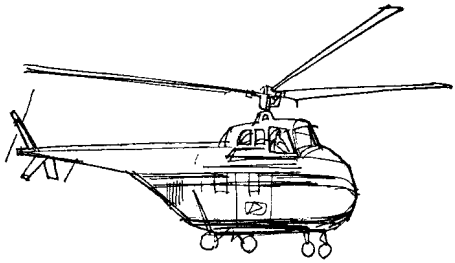
飛行機雲

著作者　大林　清
発行者　矢貴東司
印刷者　北山　茂

¥ 270.
《検印省略》

発行所　株式会社　桃源社
東京都中央区日本橋蠣殻町1—12
電話（671）4001～2番
振替東京64351番

落丁・乱丁の節はお取替え致します　1965 ©



大林清

飛行機雲

<ポピュラー・ブックス>

目次

敬介事件……七
歌姫と田園……三六
青春の闘い……七二
玉の輿……一〇八
青葉の雨……一三五
北陸の女……一五一
地主の娘……一八六
遠来の客……二〇四
古城のほとり……二三〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

装幀・カット　御正　伸

飛行機雲

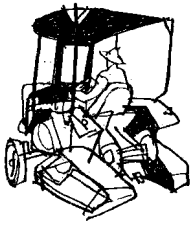
NHKテレビ連続放送

敬介事件

一

早春の陽ざしがうらうらとみなぎっている農道に、雅子は年式の古いブルーバードを走らせていた。

農道の両側は隙間もなく植樹されたリンゴ園である。収穫期には低く枝を張った一本々々の樹に、文字通り鈴生(すずな)りに実をつけるのだが、今は若葉をひろげたばかりで、澄明な信州の大気の中から思うさま養分を吸収しようとしている。



そのリンゴの樹海の上に雪の消え残った山脈の連なりが見える。一と際ぬきんでて見える雪の連峰は北アルプスである。

雅子が運転しているのはまぎれもなく白ナンバーの自家用車――だかられっきとしたオウナー・ドライバーなのだが、彼女は地主の娘でも何でもない。いや、戦後新しい農地法が施行されてからの日本の農村に、小作人の勤労の上にあぐらをかく地主階級などと言うものは存在しないのだ。

この田沢町で小中学校の女の子に、将来何になりたいかときくと、十人

が十人、有線のアナウンサーと答える。
内川雅子はその有線放送のアナウンサーだから、つまり部落に於けるスター的存在と言ってもいい。
今日も雅子は携帯用録音器、通称デンスケを自分の車に積み込んで、或る篤農家のところへ取材に出かけた帰りだった。
農道から県道へ出る手前で、雅子はふと前方へ瞳を凝らした。
ジーパンにジャンパー姿の若者が、ひょいと脇の道から出て来たからだ。
——敬ちゃんじゃないかしら？
雅子と中学まで同級だった長井敬介なら、東京の板橋区の何かの工場へ、工員として働きに行っている筈だった。
雅子はブレーキを踏んだ。
立ちどまった相手は、とまどったように雅子の方へ眼をむけた。
「敬ちゃん！　どうしたの？」
雅子は窓から首をさしのべた。
敬介はうろたえたように頭を下げた。
「いつ帰って来たの？」
「今日、さっき……」
「家へ帰ったの？　小母さんならあたしのところにいる筈よ」

敬介の母のとめは、このところ雅子の家へ手伝いに雇われて来ているのだ。
「そう、じゃまた……」
敬介はふいに身をひるがえして、反対側の農道へ飛び込んで行った。
雅子は呆気にとられた。雅子の家はそっちの方角ではないし、敬介自身の家も同様だった。それよりも何よりも、人懐こい敬介にしては腑に落ちない挙動である。
雅子が車を走り出させた時、敬介の姿は彼の飛び込んで行った農道の奥にも見えなかった。
舗装された県道はしばらく行くと、両側に商店などの建ち並ぶ街の中へ入り、電鉄の駅の方へ曲る十字路の先に農協の木造二階建てがある。雅子の勤めている有線放送室は、その農協の建物の中にあるのだ。
雅子が放送室へ入って行った時、恰度通話の時間に切替ったばかりで、五台の交換台の前のアナウンサー兼交換手たちは、通話の交換に大わらわだった。
「ちょっと悪いけど、十一番へつないでくれない？」
雅子は交換の切れ目を待って、同僚の多田敏枝に言った。
「オーケイ」
敏枝はすぐ十一番を呼び出した。雅子の家の番号なのである。
雅子がレシーバーを耳にあてると、嫂(あによめ)の喜久子が出ていた。
「あたしよ。長井さんの小母さん今日来ている？」
「ええ、来ているわよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

何事かといぶかる調子である。
「今あたし外へ出て帰って来たんだけど、敬介さんに途中で会ったのよ。小母さんまだ知らないんじゃないかと思って……」
「へーえ、何とも言ってなかったけど……今牛舎の掃除してるから教えてあげるわ」
「お願いします。それだけなの……」
「あのね……」
雅子が通話を切ろうとするのを、喜久子はあわてて押え、
「頼雄さんが明日帰って来るんですって」
「ほんと！」
「さっき電報が来たの、今日は新潟県の方へ農薬散布の仕事で行っているらしいわ。恰度明日はあなたのお誕生日だし、午後には家族の顔が揃う訳よ」
「そう、頼雄兄さんあたしのバースデイだなんて知らないんでしょう」
「さア、それはどうだか……じゃアね」
喜久子は電話を切った。
「東京のお兄さん帰って来るの？」
隣で交換をしていた久米良子が、顔を寄せるようにしてきいた。
「そうらしいの」
「わア素敵、一度有線へつれて来てよ」

「いそがしいからひまがあるかどうか……」
良子にかぎらず此処の同僚の誰彼に頼雄が人気があるのは、雅子としても悪い気持のものではなかった。
頼雄は航空自衛隊出身で、現在東京に本社のある極東空輸のヘリコプター操縦士である。田沢へも度々空からの農薬散布に来ているので、町中に彼の名は知れわたっているし、殊に若い娘たちにはアイドルであった。彼の容姿が端麗なのも勿論その理由にはちがいない。

二

雅子が長井敬介と出会った前後に、もう一人敬介の姿を見た者がある。深沢雄一郎がそれだった。
雄一郎の家は雅子の家と同じ開拓農家で、隣同志でもあった。隣と言っても耕地やリンゴ園を隔てているので、お互いの家の屋根が辛うじて見えるぐらいの距離はある。
雄一郎は農道にトラクターを走らせていた時、二三十メートル先を歩いている敬介をみとめたのだった。尤も相手が振りむいたのでそれとわかったのだが、どう言う訳か敬介は急に足を早めて道を折れてしまった。
雄一郎はおかしな奴だなと思った程度で、それほど気にもとめなかった。
「学校から手紙が来ているよ」
母親のむらが、土間へ入った雄一郎を見るなり言った。

土間のテーブルの上に、その封書は乗っていた。雄一郎が去年の春まで行っていた東都工業大学から来たものである。

雄一郎は無言のまま、中身を引き出して読み下した。

「何て言って来たんだい」

土間に続く炊事場から、食事の仕度をしていたらしいむらが、手を拭き拭き出て来た。

「復学のことだよ、今月いっぱいで期限が切れるから、復学希望なら今月中に手続するようにって……」

雄一郎はブスッと答えた。

「今月過ぎると駄目ってことかい」

「うん」

雄一郎は重い返事をして椅子にかけた。学校からの手紙と聞いた瞬間、その内容は見当がついていたのだ。

そこへ今日はリンゴ園の仕事をしていた定吉が戻って来た。

「何だ、雄一郎の方が先だったか」

「学校から来たよ」

雄一郎はまだ開いたまま手にしていた手紙を差し出した。

「何だって？」

定吉はギクリとした顔になり、遠くへ離して読んだ。

「で、お前どうする気だ」
一応そうはきいたが、雄一郎をこのまま手許に置きたいのが定吉の本心だし、雄一郎もそれを知っていた。
「どうするって、僕はそりゃ行ければ行きたいけど……」
「うーむ……」
定吉は困ったと言うようにうめいた。
「二年まで行ったのに惜しいと思う」
「そりゃ惜しいさ、月謝を捨てたようなもんだ。だが、俺も近頃めっきり頑張りがきかなくなったからな。お前がいなくなると、人手を借りないことにはとてもやって行けないだろう」
婉曲な反対の表明だった。
むらは黙っている。どっちかと言うと雄一郎に好きな道へ進ませたい方なのだ。
雄一郎の機械好きは子供の頃からで、時計でも何でも機械さえあてがっておけば、分解したり組立てたりして飽きることがないと言う風だった。高校は長野へ通ったが、成績は抜群で、教師のすすめもあって工大を受験したところが、満足な受験勉強もしていなかったのに、楽に合格してしまったのである。
定吉はもともと雄一郎の大学進学に気乗りしていなかったのだが、そうなっては工大入学を許さない訳にはいかなかった。
この部落の開拓農家は入植してから十八年になる。リンゴ採培や酪農でやっと生活の安定しかけ

たのはこの三四年のことなので、深沢でもこれから一家を背負って立つ一人息子の雄一郎を大学へやることは、たしかに一大決心を要することだった。学資の負担も決して楽ではなかった。

そこへ幸か不幸か、定吉が持病の喘息を悪化させて寝込んでしまった。去年の春のことである。雄一郎はやむをえず学校を休学にして帰郷し、この一年間父親に代って働いて来たのだった。昨今定吉はようやく健康を恢復し、作業も出来るようになったが、雄一郎に学校へ帰れとは言わなかった。このまま雄一郎が家にいついて、エンジニアへの夢を捨てるのを希っているようだった。

「俺が戦争から復員したのが終戦の翌年で、引揚げた南洋へは帰れないし、仕方なしに北海道へ開墾に入った……」

定吉は急にそれまでの話題と関連のない述懐をはじめた。

「ひどかったなア、北海道じゃア……昭和二十三年に此処へ移って来るまでは、まったく食うや食わずの苦労の連続だった。此処へ来た当座も楽じゃアなかったが、まアだんだん苦労が実を結びはじめた。今じゃ旧農家が俺たちを手本にするようになっている。これからは頭の使いようでよくなる一方だ。それはお前たちがやらなきゃならないんだ」

ギョロリと眼を剝かれて、定吉の言おうとしていることが雄一郎にはやっとわかった。

「此処までお前苦労を積み重ねて来て、これから花を咲かせようって時に、農業を捨てちまうってのは馬鹿な話だ。お前が次男だとか、長男でもせめて弟がいるって言うんだったら話は別だが……」

「それなら何故俺を工大へやったんだい」

「そりゃあの時は高校の先生に口説かれて、ついフラフラッとその気になっちまったんだ。まア二年でも好きなことをやったんだから、お前も気が済んだろう。ここらで考えなおして、百姓に身を入れたらどうだ」

「おやいけない！」

むらが頓狂な声をあげた。

「もうこんな時間かねえ、早くご飯にしないと……」

雄一郎はそれを機会に、作業着を着替えに立った。

「まアよく考えろよ。お前が技師か何かになるまで何年かかるか知れないが、そうしたら俺たちの汗の泌み込んだ土地はいったいどうなるかってことをな」

定吉は奥へ入って行く雄一郎の背中へ言った。

三

雅子の勤務は早番が午前七時、日勤が九時、宿直が午後二時に放送室へ入ることになっている。その日は日勤だったので、雅子は五時退けだったが、テープの編集をしていたため、家へ帰ったのは暗くなってからだった。

雅子の家は長兄の耕一が当主で、その妻の喜久子と父の釜次郎、それに雅子の四人家族。リンゴ園と畑を耕一が主になってやり、喜久子と釜次郎は酪農をやっている。尤も確然と分業にしている訳ではなく、牛乳を集乳所へ運ぶのは耕一の役目だし、リンゴ園がいそがしい時は、家内中でそっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb